

# アブ・シール南丘陵上石造建築残存壁体の ヒエラティック・インスクリプション

西本真一

Hieratic Inscriptions on the Remaining Wall of the Stone Building at the  
Top of the Hill to the South of Abu Sir

Shin-ichi NISHIMOTO

エジプトのアブ・シール南丘陵上に残存するカエムワセトの建物の石材にはヒエラティックで文字列が記され、その中には「右班」と「左班」に言及するものも見られるが、労働組織におけるふたつの班構成を示すものとして注目される。当遺構の北側壁体には「左班」の文字を含む5つの文字列が残る。「右班」について述べた文字列はこの壁体からは見つかっておらず、建物の工区の分担との密接な関連が想定される。王家の谷の岩窟墓の造営に関わった労働組織の両班は、パッチワーク状に仕事を進めたという近年の論考があるが、これは画工の仕事を対象とした分析結果であり、建造作業においてはこれとは多少異なって、班分けされた労働組織によって工区の分担がなされたとみなすのが妥当である。

キーワード：インスクリプション、古代エジプト、新王国時代、建造工程、労働組織

*A large number of hieratic inscriptions mentioning 'the right side' and 'the left side' have been found on the stone blocks of the monument erected by Khaemwaset at the top of a hill in Abu Sir, suggesting the presence of a workforce divided into two groups. Five inscriptions mentioning 'the left side' have been discovered on the north wall of the building, whereas 'the right side' seems never to be mentioned there, apparently clearly reflecting a process in which work at the construction site was divided between two groups of builders. This division of the workforce at the Theban royal and private tombs is well known from textual material; however, recent detailed studies of the mural paintings in the tombs have suggested that, in fact, there was no strict division of responsibility at the site, except for administrative convenience. However, since this result has been obtained from analyses of the styles of individual painters and from an architectural perspective, it is natural to assume that slightly different methods were used in the course of building and that each of the two divisions of the workforce must have been given responsibility for different parts of the construction.*

Key-words : Ancient Egypt, New Kingdom, inscription, building process, work organization

## はじめに

アブ・シール南丘陵上の石造建築は古代エジプト新王国時代第19王朝の王ラメセス2世の第4王子、カエムワセトによって建造されたと考えられる遺構であり、早稲田大学エジプト学研究所によって発見され、発掘調査が1991年から継続して進められている<sup>1)</sup>。

この石造建築は、8本の柱が2列並ぶ壮大なポルティコを前面に備えていたことがこれまでの発掘調査によって知られている。丘陵頂上南端に聳え立っていたはずのこの建物は、おそらく遠方からもよく望むことができたに違いない。遺構の壁体はわずかに残存するに過ぎず、徹底した石材の持ち出しがおこなわれた痕跡がうかがわれる。再利用

を目的として石造建築から石材を持ち出すことはしばしば古代エジプト建築で見られ、当遺構においてもこれが組織的におこなわれたことが仄めかされよう<sup>2)</sup>。特に建物後部の西方と南部については多くの石材が失われており、建物全体の復原考察を進める上で大きな妨げとなっている。

残存遺構の周辺には、壁体から外されたものの、丘陵を離れて持ち去られなかった石材が散乱しており、それらの中には現存遺構に見られる礎石と大きさがほぼ同じながらも粗削りのままにおかれている礎石や、新王国時代のリーフを彫り残した石材などが観察された。従って、当遺構の建造作業は完成間近まで進められたが、一部分は結局のところ完全に仕上げがなされないままに終わったとみな

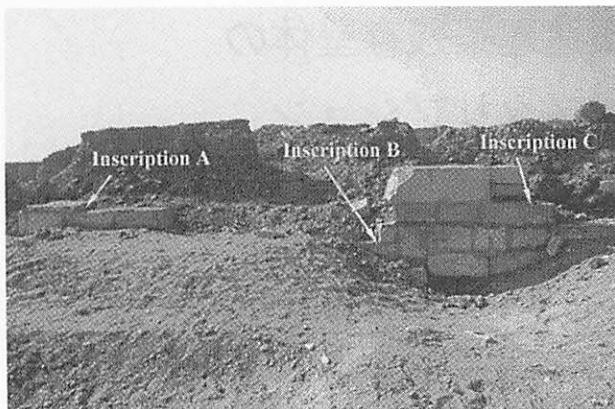


図1 アブ・シール南丘陵上石造建築、北側残存壁体、東部分と中央部分を北より見る

される。

今まで詳細な石材の観察が続けられているが、注目されるのはこの遺構もまた近辺に立ち並ぶ古王国時代の建造物から多量の石材を丘陵上に運び上げ、これらを用いて建造されたと推定される点であり、カエムワセトがメンフィス地域のピラミッドに残したいわゆる「修復ラベル」<sup>3)</sup>との関わりが示唆される。

ここで取り扱おうとしているのは、数段だけ残存する北側壁体基礎部に記されていたヒエラティック・インスクリプションである(図1~11)。文字は他の場合と同様、黒インクで記されていた。いずれの場合においても「左班」に関して言及しており、当遺構の建造作業に携わった労働組織の班構成との関連が注目される。遺構の付近に散乱する石材に残されていた同種のインスクリプションについてはすでに秋山・高宮両氏による包括的な論考がなされており(Akiyama and Takamiya 1998)、本稿ではこの成果を踏まえながら考察を進めたい。

#### 残存壁体のインスクリプション

前述したように当遺構の建物後部においてはほとんどの石材が持ち去られており、北方の外側壁体下部が3箇所にわたって島状にうかがわれるだけである。今、これらを便宜上、東部分、中央部分、そして西部分と名づけることとする。インスクリプションはこれらの残存壁体において合計で5つ発見された。

##### インスクリプションA(北側残存壁体、東部分:図4)

“Smhy...”

「左班...」

石材上面に記された文字であり、文字列の後半はこの上面に据えられた石材と塗られた白色プラスターによって幾分隠されている。このために、「左班」の語に続く縦線など、いくらかの文字らしきものはうかがわれるものの、全文の

判読は困難である。残存状況は良好ではなく、経年変化による退色がかなり進んでいる。

インスクリプションB(北側残存壁体、中央部分東側:図6)

“Smhy P3-nhsy”

「左班、パネヘシイ」

石材の側面に書かれた文字列である。文字は明瞭に残るとともに、smhy の s の上方には黒インクの垂れが、現在の石材が置かれた位置から見て下から上へ向かって流れた跡が観察され、文字列が書かれた後にこの石材の上下を逆さまにして置いた時期があったことが示唆される。「パネヘシイ」という人物名は、他の散乱石材でもうかがうことができる<sup>4)</sup>が、右班に属する者として記される場合が見られる点は興味深い<sup>5)</sup>。

インスクリプションC(北側残存壁体、中央部分西側:図7)

“Shmy (sic) Nb-w'w”

「左班、ネブウワウ(ネブウワア)」

石材側面の、風蝕を受けて茶色に変色した面に記されている文字列であり、比較的明瞭に残存する。Smhy ではなく Shmy と綴られているが、「左班」をこのように記す例が他にも知られている(Cerny 1973: 102-103)。他の石材に記されていた「ネブウワア」という名前はすでに報告されており<sup>6)</sup>、左班に属する者として記される場合も1例見られる<sup>7)</sup>。

インスクリプションD(北側残存壁体、西部分中央下部:図10)

“Smh [y]”

「左(班)」

壁体最下部の石材側面に記された文字列である。壁体の基礎として据えられた石材に対し、下から上に向かって書かれた文字列で、おそらく石材が据えられる前の、現状と異なった向きに置かれていた時に文字が書かれたと推察される。この石材は側面上方が削り落とされており、これに伴って文字列の後半も失われている。

インスクリプションE(北側残存壁体、西部分西側:図11)

“Smhy 'I3i3”

「左班、アイア」

石材の側面に記された文字であり、かなり薄らいではいるものの、かろうじて読むことができる。文字列は石材の右端からほとんど余白を設げずに始められている。「アイア」は他の散乱石材に記されている文字列でも見ることのできる名前である<sup>8)</sup>。インスクリプションBのパネヘシイと同様、アイアもまた右班に属する者として記される場合が見られる<sup>9)</sup>。

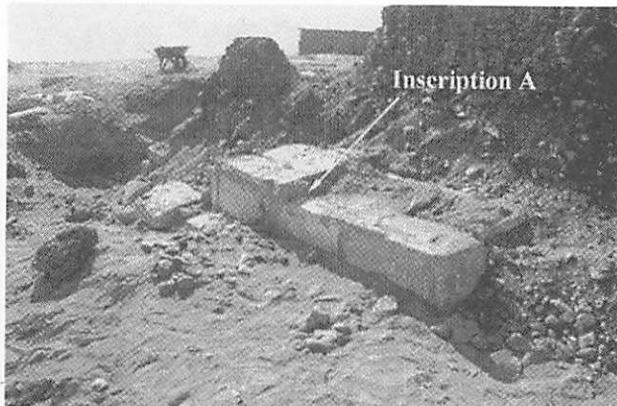


図2 アブ・シール南丘陵上石造建築、北側残存壁体の東部分を西より見る

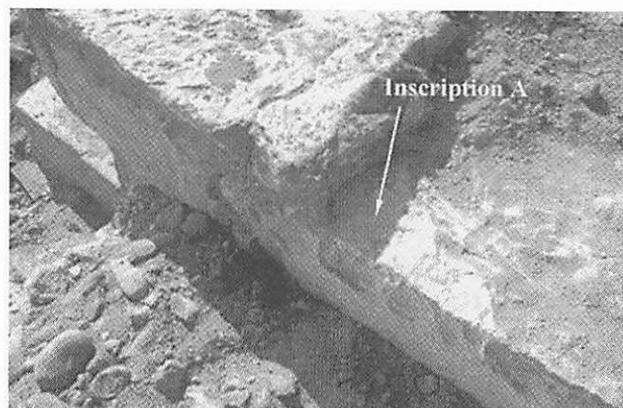


図3 北側残存壁体の東部分、インスクリプションA



図4 北側残存壁体の東部分、インスクリプションA、拡大図。上、写真；下、トレス

## 考察

「左班」あるいは「右班」という言葉は、新王国時代後期に王族の岩窟墓の造営に携わったディール・アル=マディーナの労働者たちの間で「左側の作業班」、「右側の作業班」を示す略語として用いられ、多数のオストラカに記録が残されていることが知られている<sup>10)</sup>。建造作業に関連した記録の中でこの語が使われている例としては、テーベ以外では新王国時代に属するアビュドスの建築遺構の付近で見つかった1片のオストラコンで確認されるに過ぎない<sup>11)</sup>。また建造石材にこれらの文字が記された例はきわめて限定され、わずかにテーベのメルエンプタハの葬祭殿で報告されているのみである<sup>12)</sup>。アブ・シール南丘陵上の石造建築でこの語が書かれた石材が多数発見されたことは、メンフィス地域でもふたつの班に分かれて建造作業がおこなわれたことを示す点で、きわめて貴重である。

だが右班と左班がどのように仕事を分担したかについては未だに不明な点が少なくない。これはディール・アル=マディーナにおける文字資料の中で、両班に関しては繰り返し記録がなされながらも、遺構における実際の各班の分

担が明瞭でないことに起因している。ディール・アル=マディーナの労働者組織に詳しいチェルニー（J. Cerny）は、労働者たちの間で文字通り「左班」が岩窟墓の左側を、また「右班」が右側を担当したであろうと推測をおこなった（Cerny 1975: 620）。しかし近年の詳細な研究は、むしろ各班が墓内両側の部分部分をパッチワーク状に担当したらしいという傾向を明らかにしつつある<sup>13)</sup>。ただし、ここで言う労働者たちとは主に画工たちのことであり、墓内に描かれた壁画の分析を通じ、遺構における実際の分担部分を同定している点に注意を向けておくべきであろう。

アブ・シール南丘陵の頂上に散乱した石材に記されている「左班」、「右班」の文字については、出土場所と班の左右に関連が認められないという見解が、すでに秋山・高宮両氏によって示されている（Akiyama and Takamiya 1998: 61）。確かに原位置を動かされた石材の出土場所について、記された左右の班名と関連はうかがわれそうにはない。一方でここに取り上げたインスクリプションについては、見出された数が5つと少ないものの、北側壁体に残して原位置が動かされていないこれらのいずれもが「左班」に言及しており、「右班」に関する記述が皆無である点は注目され、明瞭な傾向が認められるように思われる。

比較的資料が豊富であるディール・アル=マディーナにおける班構成を念頭において、アブ・シール南丘陵上の石造建築物における班構成を考察しようとする時、いくつかの錯綜した問題を整理することが必要である<sup>14)</sup>。

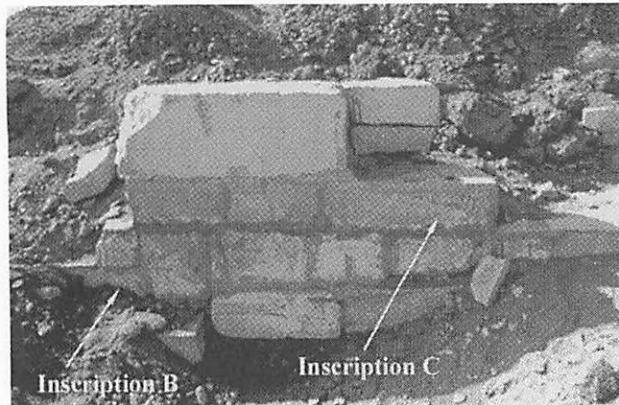


図5 北側残存壁体の中央部分を北から見る



図7 北側残存壁体の中央部分、インスクリプションC。  
上、写真：下、トレース

近の遺跡から丘陵上へと石材を運び上げた際に書きつけられたと推定される。おそらくは建造に関連した積算のために記された可能性が高い。前者と後者との間で労働内容の相違が見られ、一方は壁画の制作、他方は石材の運搬とそれらの組積である。



図6 北側残存壁体の中央部分、インスクリプションB。  
上、写真：下、トレース

(1) ディール・アルニマディーナの労働者たちもアブ・シール南丘陵上の石造建造物の建造に携わった労働者たちも、「左班」、「右班」と呼ばれるふたつの班からなる組織を構成していた点は文字資料から明らかである。

(2) ディール・アルニマディーナの労働者たちの「左班」、「右班」が、実際の遺構の左右とは関わりなく仕事を進めたらしいという近年の研究成果は、画工たちの仕上げた墓内の壁画を対象とした分析に負っている。一方でアブ・シール南丘陵上の石造建造物における「左班」、「右班」の区別とは、石材に書かれた文字資料に基づいており、これらのインスクリプションは建造作業に関わった労働者たちが付

(3) 班名はしかし、ディール・アルニマディーナの場合には前述のように実際の遺構の左右と合致していたとは思われない。アブ・シール南丘陵上の石造建造物の場合はいくらか事情が異なり、北側壁体に残存していた5つのインスクリプションはいずれも「左班」という記述を含み、「右班」に関する言及は見られない。もし北壁残存部に「左班」の語が集中している事実を偶然とみなさず、そこに何らかの理由を求めるならば、当遺構の労働者組織における班分けとの関連を第一に考慮すべきである。この時、「左」とは当遺構の最奥部から見た方向となる。王墓のひとつを図面で示した新王国時代のパピルスには左右に関する言及があり、そこでは当遺構と同じく、岩窟墓の奥から眺めて左右を言い指している点が興味深い (Carter and Gardiner 1917: 144)。

(4) アブ・シール南丘陵上の石造建造物における散乱石材では、「左班」、「右班」の書きつけと石材の出土位置との間に明確な関連性が認められなかった。壁体などから外された石材はいずれの場合も、かなりの程度、位置が動かされたことが示唆される。当遺構前面のポルティコに本来は属

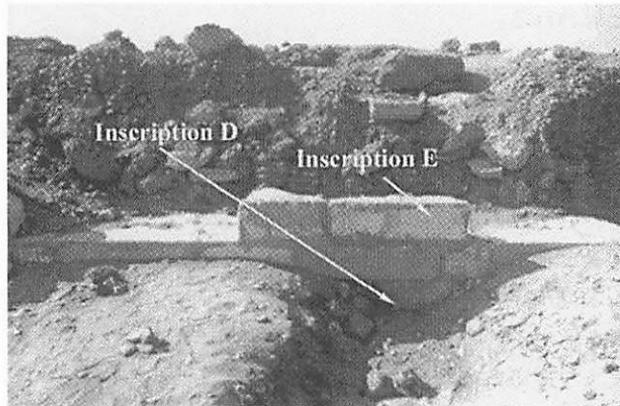


図8 北側残存壁体の西部分を北から見る

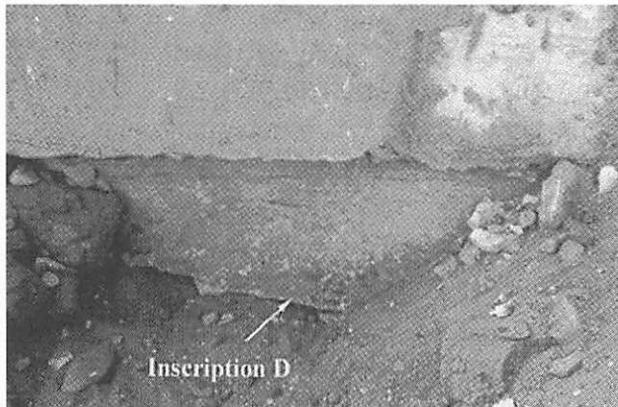


図9 北側残存壁体の西部分、インスクリプションD

図10 北側残存壁体の西部分、インスクリプションD、拡大図（ともに上を左に転倒）。  
上、写真：下、トレース

するべきことが明瞭であった柱の建築部材なども、遺構の東側から多く出土する傾向にあったが、出土位置のその範囲は広い。一方でポルティコの壁面に施されていたと見られるレリーフの小さな断片に関しては、その出土位置が特定の場所に集中する明瞭な傾向を有する<sup>15)</sup>。石材の持ち出しに当たり、不要なレリーフの一部は当初の位置で細かく破碎されたと見られる。また原位置のすぐ近くに置き去られていた花崗岩製の偽扉に典型的にうかがわれるよう、あまりにも巨大で重い石材については原位置をほどどめている例も見受けられる。以上のように、出土位置をめぐって多様な傾向があることを前提とするならば、散乱石材の場合に「左班」、「右班」の記述と出土位置との間に関連性が認められなかったという考察結果と、北側残存壁体に見られるインスクリプションが「左班」だけに言及しているという傾向とは矛盾しない。

(5) インスクリプションBに登場するパネヘシイ、またインスクリプションEのアイアについては、ここでは左班に所属することが明記されているものの、他の散乱石材においては右班に属する者として書かれている場合が見られ、

左右の班で構成人員が交代することもあったことがうかがわれる。散乱石材の場合においてもこうした例は見られ、すでに報告がなされている点は前述した。しかし頻出例は少なく、こうした人員交代が頻繁におこなわれたとはみなし難い。ディール・アル＝マディーナの場合にも同様の例がいくつか知られており、暫定的な交代であったろうと推測されている(Cerny 1973: 109)。構成員の交代についてはどちらの労働者集団にもうかがわれるが、しかし少数に限られるという共通性が指摘されよう。

北側壁体に残存する原位置を保ったままの5つのインスクリプションが「左班」のみに言及する点を、労働者組織における班分けの制度と積極的に関連づけようとするならば、これまで知られているディール・アル＝マディーナにおける班分けの様態との相違が明確にされなければならない。おそらくディール・アル＝マディーナの労働者たちとアブ・シール南丘陵上の石造建築の造営に携わった労働者たちとの間の最も大きな差異とは、上記したようにその労働内容にあったと推測される。建造作業とは画工たちの仕事と異なり、多数の石材を運搬して建築を下から順次、立ち上げていくという重労働をおこなわなければならなかつたから、絵画のようにパッチワーク状に仕事を進めるとい

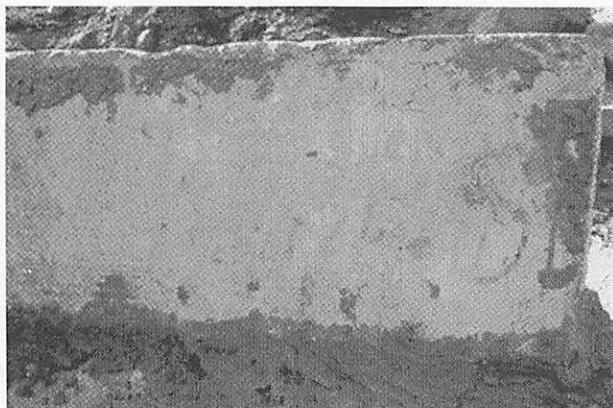


図11 北側残存壁体の西部分、インスクリプションE。  
上、写真：下、トレース

うことが原理的にきわめて困難であったはずである。あらかじめ絵画を描くべき空白が用意されており、好きな場所から次々と絵や文字で埋めていくことができた画工たちの仕事とは異なり、建造者たちは屋根を架ける前には壁体の築造を、また壁体の前には基礎を造らなければならなかつたという比喩でこれを言いあらわすことができる。作業を効率良く手順を踏まえて円滑に進めるために建築をいくつかの工区に分け、複数の班によって分担をおこなうという古代エジプトの伝統的な建造方法が、当遺構においても採用されたとみなした方が建築学的観点からは自然であり、5つのインスクリプションは工区を分担して建造作業を進めたことを示唆する貴重な資料と考えられよう。

ただし、具体的にどのような工区分けをおこなったかは今後の課題であり、丘陵頂部の南端に寄せられた場所を建築の敷地としているために、建物の周囲に均等な作業場を確保することができなかつたことは明瞭である。特に建物の南方には作業場として用いることのできる余裕のある場がほとんど見られず、建材をこの場所に直接供給することさえ多大な困難が伴つたであろうと思われる。このため、パピルスに描かれた王墓の平面図の場合と同じように、建物の奥から見て左に該当する場所に「左班」という記述が集中してうかがわれる点は興味を惹くものの、当遺構の長軸を境として各班が単純に左半分と右半分とを分担したとは技術的側面からは考えにくく、各班が運搬を担当した石材の形状の差異、あるいは加工技法の詳細な相違などから、班による石材供給の場所の違いや、おおまかな工区の推定をおこなうことが可能かどうか、検討を重ねる必要がある

と思われる。

### 結語

アブ・シール南丘陵上の石造建築の北側残存壁体に記されていた5つのインスクリプションに関して報告をおこない、いずれの場合にも「左班」に言及している事実の解釈をめぐって考察を進めた。壁画の制作に携わったディール・アル=マディーナの労働者たちはパッチワーク状に仕事を進めることができたものの、建造作業においてはこのような進め方は現実的ではなく、当遺構での労働者たちの班分け構成を示す文字の特定の場所への集中は、建物の工区の分担と密接な関連があると想定される。ただ実際の工区については単純に建物の左右で分けられたとは思われず、今後の詳しい研究が待たれる。

石材に班名が記されている遺構は限られ、現在までのところ、メルエンプタハの葬祭殿が挙げられるだけである。この遺構に関してはスイスの調査隊が再発掘調査を進めており、3巻からなる最終報告書を刊行中である<sup>16)</sup>。この調査の成果も含め、ディール・アル=マディーナでうかがわれる画工たちの班分け構成と、建造作業に携わる労働者たちの班分け構成との相違を総合的に判断することが望まれる。

なお、早稲田大学エジプト学研究所の吉村作治所長から、未発表資料の使用を御許可いただいた。厚く御礼を申し上げたい。

### 註

- 1) Yoshimura and Takamiya 1994; Yoshimura and Takamiya 1995; 吉村他 1996; Takamiya and Yoshimura 1997; Yoshimura et al. 1997; Leclant 1997: 255-256; Akiyama and Takamiya 1998; Leclant 1999: 346; Yoshimura et al. 1999; Kitchen 1999: 582-583; Yoshimura and Takamiya 2000; Kashiwagi 2000などを参照。
- 2) この遺構のポルティコにおいてはきわめて特徴的な形式の柱が用いられていたが、これと同一の形式の柱片が、近郊に位置する聖エレミア修道院址の基礎部で見つかっている(柏木裕之氏による)。同所からはまた、カエムワセトの名が記されたレリーフ片などが発見されている。Gomaā 1973: 81.
- 3) Gomaā, F. 1973: 61-66; Kitchen 1999: 566-567. 近年、ペピ1世 (Leclant 1994: 385, Figs. 22-23) やセンウセルト3世のピラミッドでも見つかっている。カエムワセトが各ピラミッドに残したこうした文字はほぼ同一の内容を持ち、一般的にはこれらのピラミッドを彼が修復したことを告げるものとして知られているが、異論もある。Cf. J. Malek 1992: 57-56. カエムワセトの「修復ラベル」が発見されたピラミッドに取り囲まれるような位置にアブ・シール南丘陵上の石造建築は建つておらず、付近に立つ古王国時代の記念建造物から持ち出した石材を用いて当遺構が建造されたこととの関連が興味深い。
- 4) AK02-O670; 4-O553; 4-A203; 4-A417; 4-A467; 4-A496; 4-A558; 4-A559; 5-A704; 5-A783; 6-O707. Cf. Akiyama



- and Takamiya 1998: 52; Yoshimura et al. 1999: 22, Fig. 9, 4-5.
- 5) AK04-A417; Cf. Akiyama and Takamiya 1998: 56, 60-61.
- 6) AK04-A270; 4-A470; 4-A555; 5-A782; 6-O067 (?); 6-O181 (?). Cf. Akiyama and Takamiya 1998: 52-53, 56; Yoshimura et al. 1999, Fig. 9, 1.
- 7) AK05-A782. Akiyama and Takamiya 1998: 56.
- 8) AK02-O932; 2-O964; 4-O646; 4-A204; 5-O991; 5-A201; 6-O416. Cf. Akiyama and Takamiya 1998: 52.
- 9) AK06-O416. Cf. Akiyama and Takamiya 1998: 56, 60-61.
- 10) Cerny 1973: 99-103; Eyre 1987: 167-221.
- 11) Gunn 1933: I, 92-94; II, Plates, XC, 1 and XCII, 1. なお、きわめて似た内容を記した別のオストラコンがベルリン博物館に収蔵されている。Cf. Berlin 1911: Pl. 30, P. 11292.
- 12) Spiegelberg 1896: 23; Pl. IX, 18, 20, 21, 25 (unnumbered).
- 13) Kozloff 1979: 65-66; Keller 1981: 11-12; Eyre 1984: 206-207; 磯部 1997: 48.
- 14) 考察を進めるに当たり、高宮いづみ氏には多くの貴重な示唆と助言をいただいた。記して感謝申し上げる。
- 15) Yoshimura et al. 1999: 12; 高宮 2000: 108-115.
- 16) 現在、Bickel 1997のみが刊行されている。
- 参考文献**
- Akiyama, S. and I. H. Takamiya 1998 Hieratic Dockets from the Monument of Khaemwaset at North Saqqara: A Preliminary Report (1). *Orient* 33: 46-63.
- Bickel, S. 1997 *Untersuchungen im Totentempel des Merenptah in Theben III: Tore und andere wiederverwendete Bauteile Amenophis' III*. Beiträge zur ägyptischen Bauforschung und Altertumskunde 16, Stuttgart, Franz Steiner Verlag GmbH.
- Carter, H. and A. H. Gardiner 1917 The Tomb of Ramesses IV and the Turin Plan of a Royal Tomb. *Journal of Egyptian Archaeology* 4: 130-158.
- Cerny, J. 1973 *A Community of Workmen at Thebes in the Ramesside Period*. Bibliothèque d'Étude 50, Le Caire, Institut Français d'Archéologie Orientale.
- Cerny, J. 1975 Workmen of the King's Tomb. In I. E. S. Edwards, C. J. Gadd, N. G. L. Hammond, and E. Sollberger eds., *The Cambridge Ancient History II*, pt. 2 (3rd ed.), Cambridge, Cambridge University Press.
- Eyre, C. J. 1984 A Draughtsman's Letter from Thebes. *Studien zur Altägyptischen Kultur* 11: 195-207.
- Eyre, C. J. 1987 Work and the Organization of Work in the New Kingdom. In M. A. Powell ed., *Labor in the Ancient Near East*, American Oriental Series 68, New Haven, American Oriental Society.
- Generalverwaltung 1911 *Hieratische Papyrus aus den Königlichen Museen zu Berlin III: Schriftstücke der VI. Dynastie aus Elephantine, Zaubersprüche für Mutter und Kind Ostraka*. Leipzig, J. C. Hinrich'sche Buchhandlung.
- Gomaà, F. 1973 *Chaemwese: Sohn Ramses' II. und Hoherpriester von Memphis*. Ägyptologische Abhandlungen 27, Wiesbaden, Otto Harrassowitz.
- Gunn, B. 1933 *The Graffiti and Ostraka*. In H. Frankfort, *The Cenotaph of Seti I at Abydos*, 2 vols. London, Egypt Exploration Society.
- Kashiwagi, H. 2000 Ramesside Building Activities on the Monumental Building of Khaemwaset. In Z. Hawass and A. M. Jones (eds.), *Eighth International Congress of Egyptologists: Abstracts of Papers* 97. Cairo, International Association of Egyptologists.
- Keller, C. A. 1981 The Draughtsmen of Deir el-Medina: A Preliminary Report. *American Research Center in Egypt Newsletter* 115: 7-21.
- Kitchen, K. A. 1999 *Ramesside Inscriptions, Translated and Annotated, Notes and Comments II*, 582-583. Oxford, B. H. Blackwell Ltd.
- Kozloff, A. P. 1979 A Study of the Painters of the Tomb of Menna, No. 69. In W. F. Reineke (ed.), *First International Congress of Egyptology*, Acts. Berlin, Akademie Verlag.
- Leclant, J. 1997 Fouilles et travaux en Égypte et au Soudan, 1995-1996. *Orientalia* 66: 255-256.
- Leclant, J. 1999 Fouilles et travaux en Égypte et au Soudan, 1997-1998. *Orientalia* 68: 348-350.
- Málek, J. 1992 A Meeting of the Old and New. Saqqâra during the New Kingdom. In A. B. Lloyd (ed.), *Studies in Pharaonic Religion and Society in Honour of J. Gwyn Griffiths*, 57-76. London, Egypt Exploration Society.
- Spiegelberg, W. 1896 The Inscriptions. In W. M. F. Petrie, *Six Temples at Thebes*, London, Bernard Quaritch.
- Takamiya, I. H. and S. Yoshimura 1997 Waseda University Excavations at North Saqqara: A Preliminary Report on the First Three Seasons, December 1991-September 1993. *Orient* 32: 69-83.
- Yoshimura, S. and I. Takamiya 1994 A monument of Khaemwaset at Saqqara. *Egyptian Archaeology: The Bulletin of the Egypt Exploration Society* 5: 19-22.
- Yoshimura, S. and I. Takamiya 1995 A Monument of Khaemwaset Discovered by Waseda University at North Saqqara. In C. J. Eyre ed., *Seventh International Congress of Egyptologists, Cambridge, 3-9 September 1995: Abstracts of Papers*, 207-208. Oxford, Oxbow for International Association of Egyptologists.
- Yoshimura, S. et al. 1997 Waseda University Excavations at North Saqqara: A Preliminary Report on the Fourth Season, August-September 1995. *The Journal of Egyptian Studies* 5: 5-34.
- Yoshimura, S. et al. 1999 Waseda University Excavations at North Saqqara: A Preliminary Report on the Fifth Season, July-September 1996. *The Journal of Egyptian Studies* 7: 5-28.
- Yoshimura, S. and I. H. Takamiya 2000 Waseda University Excavations at North Saqqara from 1991 to 1999. In M. Barta and J. Krejci (eds.), *Abusir and Saqqara in the Year 2000*, 161-172. Praha, Academy of Sciences of the Czech Republic, Oriental Institute.
- 磯部久美子 1997 「『古代エジプトの色と彩色画法』参加報告」『エジプト学研究』5号 40-50頁 早稲田大学エジプト学会。
- 高宮いづみ 2000 「図像をどう見るか」 第14回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会編『エジプトを掘る:それをめぐる様々な学問分野』108-117頁(株)クバプロ。
- 吉村作治他 1996 「アブ・シール南・丘陵頂部建築遺構の『建造墨書』」『日本建築学会技術報告集』2号 189-193頁 日本建築学会。

西本真一  
早稲田大学理工学部  
*Shin-ichi Nishimoto*  
*Waseda University*

## 追記

2001年夏に実施された、第10次アブ・シール南丘陵頂部の発掘調査では、石造建造物の構造理解のため一部北側外壁を裁ち切り、断面精査を行った。調査の過程で多数の石材が出土すると共に、壁体の最下部が露出したことから、新たにヒエラティック・インスクリプション付き石材入手することができた。

今次調査で確認されたヒエラティック・インスクリプション付き石材は計42点、うち北側外壁周辺から出土した石材は28点を数えた。内訳は(1)当初の位置を留めている石材3点、(2)原位置を離れたものの壁体の外面の石積みであったと想定される石材3点、(3)同じく内面の石積みと考えられる石材9点、(4)内部の詰め物に用いられたと判断される石材10点、(5)不明3点であった。現在、考古班を中心に整理分析作業<sup>1)</sup>が進められ、総合的な考察は調査概報に譲りたいが、ここでは本論考に関係が深い(1)(2)について報告したい。

### (1) 原位置を保っていた石材

AK10-O-103 北側残存壁体中央部分 インスクリプションBの東隣接石材  
“Wnmy ’I3i3”「右班 アイア」  
AK10-O-112 北側残存壁体東部分西端  
“Smhy...”「左班...」(石材下面に記されているため全文の判読は困難)  
AK10-O-961 北側残存壁体西部分 インスクリプションDおよびEの東側  
“Wnmy P3-s3-nswt”「右班 パサネスト」

### (2) 原位置を離れているものの壁体の外面の石積みであったと想定される石材

AK10-O-105 “Smhy P3-s3-nswt”「左班 パサネスト」  
AK10-O-111 “Smhy Nb-w’w”「左班 ネブワウ」  
AK10-O-919 “Ii3 Smhy”「アイア 左班」

(1)では「右班」の記述が2点の石材に認められ、一見すると、「原位置を保つ北側壁体が「左班」のみに集中する」とした、これまでの論考と矛盾する結果のように思われる。しかし、続く人名「アイア」と「パサネスト」は(2)の石材群でいずれも左班に属する者としても登場しており、「アイア」は先のインスクリプションEにおいても「左班」として記載されている。こうした例については先の考察でも触れた通りである。そのため、原位置を保つ2点の「右班」出土をもって班の左右に傾向は認められないと結論を下すのは早計といえるだろう。むしろ(2)の「ネブワウ」がインスクリプションCでも認められる点は、特定の班が決められた工区を分担していたことを示唆しており、先の考察を補完するものと思われる。

未発表資料の使用を御許しいただいた早稲田大学エジプト学研究所・吉村作治所長並びに第10月調査・現場主任河合望氏に対し厚く感謝申し上げる。  
(柏木裕之)

1) 第10次調査出土のヒエラティック・インスクリプションのトレース作業および分析は、現場主任・河合望氏が担当し、本追記もこの成果に依っている。